

# 『源氏物語』 朧月夜の生涯

藤原恭子

朧月夜は、源氏物語の主人公光源氏の人生の転換点とも言える須磨流離の原因ともなる女性である。彼女は、花宴で源氏と出会い、最後には出家して行く。その朧月夜の生涯を追い、源氏と朱雀帝という二人の男性をひきつけた彼女の魅力を見て行きたいと思う。

## 第一章 出逢い―「花宴」から「滯標」まで―

### 第一節 源氏の癖と朧月夜との関係

源氏にとって朧月夜は目当ての人ではなかった。目当ての人藤壺との「さりぬべき隙」(「花宴」)もなかったので、弘徽殿まで立ち寄り、偶然朧月夜と出会うことになった。そこには酔った上での源氏の好色心が働いている。源氏は偶然巡り会ったこの女君の素姓を考えて、帥宮や頭中将の北の方であったら「いますこしをかしからまし」(「花宴」)と不謹慎なことを考えたり、女君の父右大臣の耳に入ったら「わづらはしかるべし」(「花宴」)とも考えたりしてい

る。源氏にとって花宴の夜に一夜を明かした女君は、このままにしておくには惜しい女ではあっても、強く魅かれるほどではなく、藤壺への想いをかき立てる作用をするものであった。源氏のはじめの逢瀬の後、朧月夜と別れた後で、まづかのわたりのありさまのこよなう奥まりたるはや

(「花宴」)

と、弘徽殿と藤壺とを思い比べ、また、右大臣家の藤宴でも、

袖口など、踏歌のをりおほえて、ことさらめきもて出でたるをふさはしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる。(「花宴」)

と、右大臣家の今めかしい様子を見ては、藤壺の奥ゆかしさを思うのであった。このように、出逢った当初、源氏は朧月夜にそれほど執着している様子は見られない。

それでもこの人のことが心に残って忘れられず、右大臣家の藤宴の折に、ついに突き止めるのであった。それから

後は、源氏よりも朧月夜のほうが積極的に働きかけて行くことになる。源氏の方も「例の御癖」（賢木）があるためにさらに想いがかき立てられ、政敵右大臣家の姫君で帝の寵姫である朧月夜と危険な逢瀬を重ね、ついには須磨へ流離することになるのである。源氏にとって花宴の夜に逢った当時の朧月夜は藤壺恋しさの紛れにすぎず、それほど執着を見せなかつた彼女にこれほどまでに傾倒してゆくのは、もちろん朧月夜自身の魅力は強いだろうが、源氏の癖が大きく作用しているものと考えられる。

「帚木」の冒頭にあるように源氏は「あだめき目馴れたるうちつけのすぎずきしきなどは好ましからぬ御本性」だが、「あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖」がある。つまり、浮気っぽい、ありきたりの平凡な情事は好きではなく、かえって無理な恋ほど思いつめる癖があるのである。

朧月夜が尚侍に就任してからの源氏の様子は次のように描かれる。

- ・ものの聞こえもあらばいかならむと思しながら、今しも御心ざしまさるべかめり。（賢木）
- ・後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、

（賢木）

このように二度にわたって源氏の癖についての叙述がされている。作者によって、朧月夜との関係は源氏の癖によるものと示されていると言えるであろう。この源氏の癖がどのように表れてくるのか見てみたい。

花宴ではじめに逢った当時から「賢木」までには源氏を巡る状況は大きく変化している。弘徽殿で「まろは、皆人にゆるされたれば」（花宴）と我が物顔に振舞っていた源氏には、もはや後ろ楯となる桐壺帝の庇護はなく、「賢木」ではむしろ右大臣家の勢力に押され、落ちぶれてゆきつつある。一方、朧月夜は御匣殿から尚侍になり、帝の寵愛を得て時めいている。以前の、普通になびいてくる女であった朧月夜はそれほど重く見られることもない存在であったのに、この尚侍就任によって二人の関係も変わってくる。尚侍は帝の正式な妃ではないにしても、朧月夜への朱雀帝の寵愛は深く、しかも彼女は源氏の敵方といえる右大臣家の姫君である。その彼女と逢うことには自然と危険が伴われ、源氏の心を大きく揺さぶることになるのである。源氏には危機的な状況の中ほど思いがかきたてられ、あえてそれを求める癖がある。そこには、源氏の心の中に常にある藤壺への思慕も関係してくる。藤壺は父の妻であり、帝の妃である。当然それは禁じられた恋である。朧月夜との恋も、藤壺との恋ほどではないが、禁じられた恋と呼べるで

あろう。ここには大朝雄二氏の言うように「朧月夜と藤壺とのシチュエーションの類似性」が考えられる。「藤壺が帝の御妻として持っていた条件は、このばあい、朧月夜の尚侍としての条件と本質的には同一のものと言ひ得る」のであり、藤壺の持つ無理な恋という条件を追い求める気持ちが朧月夜との恋にもあると思われる。

実際に朧月夜は藤壺やそのゆかりである紫の上と比べても、源氏の中では大きな位置を占めない。源氏の正妻葵の上が亡き後、右大臣は源氏を婿にと考えるが、当の源氏は、新枕を交わしたばかりの紫の上に夢中で、惜しいとは思いつながら、朧月夜を妻に、とは考えていない。

御壇の御修法の際の朧月夜との逢瀬の後にも、次のように思う。

かやうの事につけても、もて離れつれなき人の御心を、  
かつはめでたしと思ひきこえたまふ（賢木）

自分になびく朧月夜より、自分を冷たくあしらう藤壺のこ  
とをすばらしく思うのである。

朧月夜へもしばらくの間便りをしなかつたことがあるが、  
朧月夜からの消息にも、

情けなからずうち返りごちたまひて、御心には深うし  
まざるべし。（賢木）

と心にしみず、藤壺のことに夢中のようなのである。しかし、

その藤壺は出家という形で、源氏の全く届かないところへ行ってしまった。このことも源氏が朧月夜へのめりこむ要素となっているのであろう。

朧月夜との逢瀬を重ねる一方で、このように源氏の心は他の女性にも傾いている。しかし、朧月夜の魅力は忘れ難く、源氏は破滅へと突き進んでいくことになる。源氏の癖が源氏を破滅へと突き進ませるのである。ここには危険を冒してでも恋に生きる源氏の姿が描かれている。源氏は都へ帰ってきてからも諦めきれず逢おうとするが、もう逢えない。情熱的な想いを残したまま別れざるを得なかつたこの想いは源氏の心に残ってゆくのである。

## 第二節 朧月夜の揺れる女心

朧月夜は源氏と朱雀帝という「高貴な二人の男性の間にあて、その去就にまよまよ」うのである。

朧月夜は「はなばなとものしたまふ殿のやうにて、なにごとも今めかしうもてなし」、「心にくく奥まりたるけはひは立ちおくれ、今めかしきことを好みたるわたり」（花宴）  
で生まれ育つた、いかにも今めかしい女性であった。朧月夜の恋愛にもこの今めかしさや自由さが現われている。

弘徽殿でも、右大臣家の勢力の強さにより自由に振舞えるのであろう。花宴の後、弘徽殿女御が桐壺帝に召されて

人少ない弘徽殿を、夜中にただ一人で歩き回っている。そこを突然抱きすくめられて驚き、人を呼ぼうとするが、相手が源氏だとわかると、少しは安心する。そして、愛想がなく強情な女とは見られたくないと思うのである。源氏は、かすかされて育った若い姫君にとっては憧れの対象であつただろう。その源氏と、夜中、しかも弘徽殿で出会つたのである。その偶然に朧月夜が胸をときめかせたのも無理はない。強く拒みもせずに、二人は一夜を共に過ごしたのであつた。

このはじめての逢瀬の時、朧月夜は源氏に名前を問われて、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじ  
とや思ふ〔花宴〕

という歌を詠む。吉野瑞恵氏はこの歌の「草の原」という語に注目して「朧月夜の歌は流離と死のイメージをはらんでいた。この女君は恋死をほのめかし、死の支配する世界へと男君を誘っているともいえよう」と述べる。まさしく朧月夜との恋は源氏が須磨へと退く原因となつてゆくのであつて、この歌にはその予感のようなものが込められているものと考えられる。

逢瀬の後、朧月夜は、はかなかつた源氏との逢瀬を忘れられず、物思いに沈む。東宮への入内を控えていながらも、

源氏になびき、忘れられないのである。その源氏が右大臣家の藤宴で自分に呼びかけると、こらえきれずに歌を返してしまふ。

この二人の出会い、非常に浪漫的に描かれている。花宴の華やかな余韻の残る中、劇的な出会いをし、結ばれる。名前すら交わさぬままの別れ、しかし、男がその女を突き止めての再会。その相手が今を時めく光源氏であればなおさら女の想いも深くなるものである。それからの朧月夜はこの恋に没入してゆくのである。

朧月夜は、源氏との関係が明らかになり、正式な入内は叶わなくなるが、御匣殿を経て、尚侍となる。それには、源氏を嫌う弘徽殿太后の意向が大きくあつた。しかし、朧月夜は尚侍として帝の寵愛を受けても、心はそこにはない。

御心の中は、思ひの外なりし事どもを、忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことはなほ同じき

まなるべし〔賢木〕

心の中では源氏のことを忘れ難く、同じように手紙を通わしている。五壇の御修法の際にもそれは変わらない。

つつみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。〔賢木〕

隙をぬつて逢瀬を持つ。朧月夜は、男の心変わりを恐れるほど源氏に夢中である。源氏からの便りが長い間ないとき

には、

木枯の吹くにつけつつ待ちし間におぼつかなきのころ  
もへにけり (賢木)

と歌を送り、男からの連絡がなければ自分の方から歌を送るといふ積極性を見せる。いかに隴月夜が源氏との恋に心を砕いているかがわかる。瘡病で里に下がっているときも、隴月夜の方からも源氏に働きかける。

例のめづらしき隙なるをと、聞こえかはしたまひて、  
わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ。(賢木)

隙を見つけては、危険を伴う自邸へ源氏を招き入れるのである。それは「いと忍びて度重なりゆけば、けしき見る人々もある」(賢木) ほどであったので、発見されるのも時間の問題であつただろう。そして遂に右大臣に見つかつてしまう。当然、二人は引き離されることになるが、源氏が須磨へ行つても、手紙を交わし、源氏のことを思つて嘆き暮らすのである。再び参内してもそれは変わらず、源氏のことばかりが慕わしい。

ここまでの隴月夜は初めて出会つた源氏のことと夢中である。偶然の巡り会いに心を弾ませ、名乗りもしなかつた自分のことを捜してくれた源氏に感激する。さらに、危険な逢瀬を重ねることが二人の想いを強くする。朱雀帝の側においてもその人のことは意識にない様子である。しかし、

源氏が須磨へ行き、隴月夜はこれまでの生活を顧みる余裕をもてるようになる。そこで、朱雀帝と話をするにつけても、次のように考えられてくる。

御容貌などなまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月にそふやうにもてなせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなどもの思ひ知られたまふままに、なぞてわが心の若くいはけなきにまかせて、さる騒ぎをさへひき出でて、わが名をばさらにもいはず、人の御ためさへなど思し出づるに、いとうき御身なり。(滯標)

帝の顔立ちの美しさや、限らない情愛が身にしみ、源氏と比べてみて、どうして自分の若気の無思慮にまかせてあのような騒ぎまで起こしてしまったのかと後悔するのである。それから朱雀帝の側に常に付き従うことになるのであつた。

## 第二章 別離―「滯標」から「若菜」まで―

都への帰還後、源氏の隴月夜への想いは次のように描かれる。

尚侍の君、なほえ思ひ放ちきこえたまはず。こりずまにたち返り、御心ばへもあれど、女はうきに懲りたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず。(滯

標)

朧月夜に逢おうとするが逢えず、二人の関係はそこで途切れていることがわかる。

右大臣方の勢力が強くなってゆき、源氏の力は衰えがちになる中で、敵方の姫君、しかも帝の寵妃と逢うことは自然と禁じられることであるが、その危機的な状況とそれに反発しようとする若さによって結びついた二人は、結局、源氏をめぐる政権の波にのみこまれて流されてしまった。

しかし、それによって今までのことを振り返る余裕が生まれたのである。そして、朧月夜が源氏から離れてゆく。源氏が都へ戻ってきて、今までの以上の栄華が約束されようとする時、朧月夜が源氏から離れてゆく必要はなかったはずである。それはすべて朧月夜自身の判断だったことであつた。そこに今までとは違う朧月夜を見ることができた。源氏に夢中で、他のことは何も見えないほど盲目的であつた彼女が、自己を見つめ直し、自らの判断で源氏ではなく朱雀帝を選ぶのである。今まで帝さえも及ぶことのない、絶対的であつた源氏のイメージを否定する立場に立つことになる。

「総合」において、源氏が後押しする六条御息所の娘、梅壺女御方と、権中納言(葵の上の兄)が後押しする弘徽殿女御方で総合が行われ、朱雀院が梅壺女御方に加担する

のと反対に、朧月夜は、源氏と敵対する方で、姉の娘である弘徽殿女御方に協力する。

尚侍の君も、かやうの御好ましさは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ。(総合)

後藤祥子氏が言われるように「源氏が圧倒的勝利者である時、朧月夜にとってむしろ源氏は、敵にまわすにふさわしい相手」なのである。

そうかといつて源氏とのつながりが全く途絶えているわけではなく、

今もさるべきをり、風の伝にもほのめき聞こえたまふこと絶えざるべし。(「少女」)

とあるように、消息を交わす間柄ではあつた。

源氏も朧月夜のこととは時折思い出し、永く忘れ難い存在であつた。源氏が以前関係のあつた女性を思い出すときや、女性の批評をするときは、ほとんど朧月夜も一緒に思い出されるのである。「朝顔」で紫の上と昨今の女性を論じるときにも噂に上がる。

なまめかしう容貌よき女の例には、なほひき出でつべき人ぞかし。さも思ふに、いとほしく悔しきことの方かるかな。(「朝顔」)

源氏は朧月夜の容貌をほめ、そう思うにつけても後悔の多い過去を思い出して涙を落とすのであつた。朧月夜とのこ

とは、なつかしみ、悔やむべきことの多い若き日の恋なのである。

また、源氏が女性の仮名を論評するときには紫の上に次のように語る。

院の尚侍こそ今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。さはありとも、かの君と、前齋院と、ここにこそは書きたまはめ（「梅枝」）

隴月夜の筆跡は癖があるが、朝顔の姫君や紫の上と並び優れている、と彼女の才能を評価している。

隴月夜は容貌につけ、教養面につけ優れている女性である。このような彼女を忘れ難いのは無理もない。しかし、もう二人を駆り立てるものは何もない。源氏は太政大臣として多忙な日々を送っている。隴月夜を思い出すこともあつた。隴月夜も朱雀院の側に付き従つて、穏やかな日々を送っている。この穏やかな生活のバランスを崩すことになつたのは朱雀院の出家であつた。

隴月夜は源氏の帰還後、その役割を果たしたかのように物語の中心からいなくなる。このことについて増田繁夫氏は「隴月夜の活躍する花宴巻から濡標巻あたりまでの物語で登場人物としてのこの人の第一の役割は、主人公光源氏と事を起こし、光源氏が須磨に退く契機となるといふこと

ろにあるであらう。」と述べる。その役割を終え、隴月夜は源氏の周辺からいなくなるが、源氏にとって彼女とのことは、須磨流離を含めて、青春時代の思い出として深く心に焼き付くものであつた。源氏の隴月夜への回想は、「若菜上」の「あはれに飽かずのみ思して」いた源氏の心情へとつながつてゆくものであろう。

### 第三章 再会——「若菜上・下」——

#### 第一節 源氏の情念

朱雀院の出家により、女三宮の源氏への降嫁が実現した。源氏はその話があつた当初は、自分よりも息子の夕霧や帝をすすめていたのだが、藤壺と同じ血をひく彼女に関心を抱き、遂には朱雀院の申し出を承知してしまう。しかし、その女三宮のあまりの幼さに衝撃を受け、紫の上のすばらしさに改めて感服していた。この女三宮のことに對して源氏は、

あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかる事も出で来るぞかし（「若菜上」）

と反省している。この年四十歳になつた源氏は、もう若くはない。自分の心が弱くなつたことを実感しているのである。

そのような時に、源氏と隴月夜の逢瀬が再び持たれるの

である。二人の関係は源氏の都への帰還後途切れていた。源氏が朧月夜に再び言い寄るようになる心理過程は次のように描かれてゆく。

⑥六条の大殿は、あはれに飽かずのみ思してやみにし御あたりなれば、年ごろも忘れがたく、いかならむをりに対面あらむ、いま一たびあひ見て、その世のことも聞こえまほしくのみ思しわたるを、かたみに世の聞き耳も憚りたまふべき身のほどに、いとほしげなりし世の騒ぎなども思し出でらるれば、よろづにつつみ過ぐしたまひけるを、かうのどやかになりたまひて、世の中を思ひしづまりたまふらむころほひの御ありさまいよいよゆかしく心もとなれば、あるまじきこととは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。（「若菜上」）

①の部分において、源氏の朧月夜を永年忘れ難く、もう一度逢いたいと思う気持ちが綴られるが、②の部分では、須磨流離という騒ぎを起こし、世間を氣にして慎んで過ごしていた現実を描く。しかし、ここで朱雀院の出家で平穩に暮らす朧月夜を思う③の部分で語られ、朧月夜に絶えず手紙を送るのである。この二人は以前燃えるような恋をし、源氏の須磨流離という事件を引き起こしたがために別れざるを得なかったその過去を考えると、朱雀院が出家した今、

この源氏の朧月夜への感情はごく当たり前のような印象を受ける。しかも、朧月夜からの返事は「昔よりもこよなくうち具し、ととのひはてにたる御けはひ」（「若菜上」）であつたのでは源氏がますます朧月夜に逢いたくなるのも尤もなことであろう。だが、この源氏の感情の高まりとは逆に、朧月夜からは冷たい返事しか来なかつた。朧月夜に拒否されても源氏は強引に行動に出る。ここからの源氏の行動は単なる好色心に動かされているに過ぎないという印象を受ける。これは清水好子氏も「光源氏は色好みの貴公子然と、やや戯画的に扱われている。」と指摘する。源氏は朧月夜の許を訪れるために、紫の上には、末摘花を訪ねると偽るが、その源氏の様子は「いといたく心化粧し」「薫物などに心を入れて」（「若菜上」）いた。その様子は末摘花を訪ねるにはあまりにもそわそわと落ち着かず、紫の上の悟るところとなる。源氏の態度は、はた目にもわかるほど妙に浮き足立っている。二条宮を訪ね、朧月夜を前にしても、次のように感慨にふける。

玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々など、あはれに聞こえて、しめじめと人目少なき宮の内のありさまも、さも移りゆく世かな、と思しつづくるに、平中がまねならねど、まことに涙もろになん。（「若菜上」）

人氣の少なさに移り変わる世を感じ、涙もろくなる。その



源氏はここでは平中に擬せられる。清水好子氏は花宴の源氏を業平に比していたが、「今は業平でなく平中が引き合に出されるといふ違い。」と述べ、さらに「ここでは『平中がまねならねど』と、人物名が明らかにされるところにもコミカルな調子が出ている。」と述べる。平中は「在原業平と共に平安時代の代表的色好みとして知られている。ただし業平と違って、女性を口説いても失敗することが多い。お人好しで気の弱い滑稽者という印象が強い。」<sup>註</sup>そのような平中が引き合いに出されるのである。松田成穂氏も、源氏が紫の上や女三宮の存在を忘れたかのように朧月夜を訪問しようとする態度を「紫上の許に忍び帰る折の『御寝くたれのさま』などと合わせ考えるとき、何者かに憑かれたようで、第三者の目をもってしては滑稽ですらある。」<sup>註</sup>と述べる。

その源氏の行動は、年に似合わぬ若々しい振る舞いであると言えよう。ここには、源氏の回顧的姿勢を見ることが出来る。大朝氏は、

源氏は現在の朧月夜そのものへ執着するといふのではなく、朧月夜を媒材として昔を今に呼び戻したいといった、それ自体が不毛であり、またそれゆえに極めて主情的な情念に駆られているにすぎない。<sup>註</sup>

と述べる。この源氏と朧月夜の逢瀬は、秋山虔氏によって、

光源氏朧月夜ともに、いまはむかしのかれらではない。さかしまには行かぬ歳月によって、ふたりの青春はあまりにも遠い過去におしやられている。かれらは、時間侵蝕された生への悔恨においてのみつながることのできる。いわば時間への抵抗のようなかたちで、残り火をかきたてるように情事がとげられてゆくのである。<sup>註</sup>

と説かれる。この二人の再びの情事は、昔の二人の青春時代の、若く、何者をも恐れることなく激情のもと突き進んでいったあの日々、戻ることのないその日々への懐旧の念を通して、もう若くはない、むしろ晩年を生きる二人によって持たれてゆくのである。

## 第二節 朧月夜の決意

朧月夜は朱雀院の出家後、自分も尼になろうとするが止められ、仏事の準備をしながらも平穏な日々を過ごしている。そこへ来た源氏からの「あはれなるさま」「(若菜上)が込められた手紙に対しては、若い者同士の関係ならば怪しいと疑われましょうが、今はもうその心配もない間柄であると考え、柔軟な対応をしている。しかし、源氏の逢いたいという申し出には応じない。

「いでや。世の中を思ひ知るにつけても、昔よりつら

き御心をこころ思ひつめつる年ごろのはてに、あはれに悲しき御事をさしおきて、いかなる昔語をか聞こえむ。

げに人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はんこそいと恥づかしかるべけれ」と、うち嘆きたまひつつ、

なほさらにあるまじきよしをのみ聞こゆ。(「若菜上」)

昔から源氏の薄情な心を何度も味わわされてきたこと、朱雀院のことをさしおいて今さらどんな思い出話をするのかということをお思い、他人には漏れなくても自分の心に聞かうとしぬ。臙月夜は簡単に源氏の誘いに乗るような真似はもうせず、きつぱり断っている。しかし、源氏が強引に訪ねてくると、「あやしく。いかやうに聞こえたるにか」

(「若菜上」)と機嫌は損ねるものの、無理にお願いされる、ひどくため息を漏らしながらもいざり出でざるを得ない。源氏の強引に襖を引き動かす行為にも、

なみだのみせきとめがたき清水にて行き逢ふ道ははや

く絶えにき(「若菜上」)

などとよそよそしく言い、別々の人生を送ってきたことが二人を昔のように結びつけなくしてしまったことを訴える。だが、すぐにその考えは揺らいでしまう。

いにしへを思し出づるも、誰により多うはさるいみじき事もありし世の騒ぎぞは、と思ひ出でたまふに、げ

にいま一たびの対面はありもすべかりけり、と思し弱るも、(「若菜上」)

昔のことを思い出すにつけても、自分以外の一体誰のためにあのような「いみじき事もありし世の騒ぎ」が起こったのかと思し出され、もう一度だけなら逢ってもよいはずだと決心が鈍ってしまう。

もとよりづしやかなるところはおはせざりし人の、年ごろはさまざまに世の中を思ひ知り、来し方くやししく、公私のことにふれつつ、数もなく思しあつめて、いたく過ぐしたまひにたれど、昔おぼえたる御対面に、その世の事も遠からぬ心地して、え心強くもてなしたまはず。(「若菜上」)

もともと慎重なところはなかつたが、あの事件以来、世の中のことも知りわきまえるようになり、過去のことが後悔され、公私のことにふれてはいろいろ体験し、ひどく氣をつけて過ごしていたのだが、「昔おぼえたる御対面」に、その当時のこともつい近頃のような氣持ちがして、心強くも振る舞うことができないのであった。源氏からは何度も薄情な思いを味わわれてきたことはわかっているのだが、昔の須磨の一件を考えると、心が揺れ、源氏を拒みきれないのである。それほど彼女にとって、自分のためにあの騒ぎを起こしてしまったことは、強く心に刻まれていること

がわかる。そこにはもう昔のような甘美な情緒はない。それは現在の源氏に対する想いではなく、過去に若く情熱的で自分との恋のために須磨流離という事件を起こし、世間的に傷つけられた男への想いがあったの逢瀬であった。朧月夜の心は乱れるが、昔のように感情に溺れることはない。上野英子氏は、

この時の朧月夜は、既に中年の容貌となっていた源氏を通じて、かつての最も輝いていた頃をもう一度呼び戻したかった。…中略…ともかくへあれは一体何だったのか—そのことを、今はつきりと見きわめたかった。そうすることによって抜け殻のようなこの現身に、彼女なりの決別を告げたかったのではないだろうか。

と述べる。朧月夜は長年の宮仕えをやめて一人里邸に戻っている。彼女の生涯を一緒に過ごしてきた朱雀院は出家して彼女の側にはもういない。父右大臣、姉弘徽殿太后のもと繁栄していた二条宮にはもはや昔の影はなく、寂しさが募るばかりである。正式の結婚はせず、子供もない彼女には、上野氏の言うように「思い出以外の一体何」があると言うのだろうか。朧月夜は源氏と再び結ばれることで、今までの自分を見つめ直し、そして、これからの自分の生き方につなげて行こうとするのである。こうして、七年の後、朧月夜は出家していく。

源氏からのお見舞いの手紙を見るにつけても、昔のことを深く考えざるを得ない。出家は以前から決心していたことだが、源氏のことを考えるとしみじみと感慨が込み上げてきて源氏との縁をあれこれと思ひ出すのであった。そして、もうこれからは手紙のやりとりをすることもないと思ひ、心を込めて返事を書く。その筆づかいは、源氏が紫の上上に「今の世の上手」「梅枝」と語ったその昔と同じようにみごとなものであった。こうして朧月夜は静かな出家生活へと入ってゆくのである。

朧月夜の出家は、女三宮の密通発覚後語られてゆく。源氏は女三宮の密通のことを思うにつけても、朧月夜のことを次のように思う。

二条の尚侍の君をば、なほ絶えず思ひ出できこえたまへど、かくうしろめたき筋のことうきものに思し知りて、かの御心弱さもすこし軽く思ひなされたまひけり。

(「若菜下」)

朧月夜のこととは今なお想っているが、彼女の心弱さを浅はかなものと考えている。この叙述の後に突然、朧月夜の出家が語られる。朱雀院の出家後に、すでに彼女の出家の意志は語られていた。しかし、朱雀院の諫めにより思いどおり、二条宮で仏事の準備をしていた。そこに再び現われたのが源氏であった。朧月夜は「若菜上」で出家の意志が

語られ、実際に出家する下巻までの七年間出家を思い止まっているのを見ても、源氏との関係が朧月夜の決心の妨げとなっていたことが考えられる。その源氏は女三宮の密通により、「世の中なべてうしろめたく」（「若菜下」）思われ、朧月夜への訪れも途絶えていたのであろう。本文では朧月夜の心情は何も描かれてはいないが、出家への迷いが断ち切れたのではないだろうか。源氏が朧月夜の軽率さを感じる文を語るその直後に朧月夜の出家が語られるそこに、彼女の潔さのようなものが感じられるのである。

#### おわりに

源氏は朧月夜が出家した後に、紫の上に向かって次のように言う。

なべて世のことにても、はかなくものを言いかはし、  
時々によせてあはれをも知り、ゆゑをも過ぐさず、よ  
そながらの睦びかはしつべき人は、齋院とこの君とこ  
そは残りありつるを、（「若菜下」）

ありふれた話題でも言葉を交わし合い、その時々に応じて、情緒をわきまえ風流をも見過ごさず、離れていても親しく交際できる人であったと言う。彼女は絵画に対する趣味も優れており、筆跡も当代の名手と言われるほどであり、教養面においても優れている人であったので、源氏にとって

は何につけても交際しがいのある人であったのだろう。

朧月夜は右大臣家の姫君としての強力な出自、豊かな教養を持ち、容貌も優れているなまめかしい女性であった。源氏と朱雀帝という二人の男性から愛されるが、朱雀帝の正式な妃でもなく、源氏との間にも縛られるものではなく、結婚という枠に縛られない自由な女性であったと言えよう。たやすく源氏になびく心弱さは非難されるものの、源氏との恋に一途に純情で、他の女性にはない力で積極的に働きかける。社会の秩序など関係なく自由に生きる朧月夜の生き方は、厳しい秩序意識の上に立って生きる作者紫式部には肯定的なものではなく、また、彼女には到底できないものであっただろう。だからこそ紫式部は朧月夜を描いたのではないだろうか。

朧月夜は源氏の青春時代を華やかに彩り、源氏の許を去ってからは、その豊かな教養をもって一目置かれる存在であり、源氏との再会によって最後に光を放ち、静かな出家生活へと入って行く。朧月夜はさまざまな魅力を放ちながら、その生涯を自由奔放に積極的に生きた女性であったと言えるであろう。そして、ある意味において紫式部の隠された願望の具現者であったのではないかと思われるのではないのである。

注

- 注 1 大朝雄二「源氏物語の構造についての試論」(『日本文学研究資料叢書 源氏物語Ⅲ』昭和46・10 有精堂)
- 注 2 池田亀鑑「朧月夜尚侍物語」(『源氏物語研究』昭和45・7 有精堂)
- 注 3 吉野瑞恵「朧月夜物語の深層」(『国語と国文学』平成元・10)
- 注 4 後藤祥子「朧月夜の君」(『別冊国文学・源氏物語必携Ⅱ』昭和57・2)
- 注 5 増田繁夫「朧月夜と二条后」(『国文学年次別論文集・中古Ⅱ(昭和55年)』昭和56・12 朋文出版)
- 注 6 清水好子「朧月夜再会」(『講座・源氏物語の世界』第六集) 昭和56・12 有斐閣)
- 注 7 清水好子「朧月夜に似るものぞなき」(『講座・源氏物語の世界』第二集) 昭和55・10 有斐閣)
- 注 8 注 6 に同じ
- 注 9 高橋貢著『古本説話集全註解』(昭和60・8 有精堂)
- 注 10 松田成穂「若菜巻に関する覚え書―朧月夜尚侍の叙述に触れて」(『平安文学論究三九』昭和42・12)
- 注 11 大朝雄二「光源氏の物語の構想」(『源氏物語正篇の研究』昭和50・10 桜楓社)
- 注 12 秋山虔「『若菜』巻の一問題―源氏物語の方法に関する断章」(『日本文学』昭和35・7)
- 注 13 上野英子「右大臣家の姫君たち」(『源氏物語の探究』第十五輯) 平成2・10 風間書房)
- 注 14 注 13 に同じ